

ムラでの南い——三年目

今年の活動をふりかえって

へ直販を武器に始めた。われわれの「ムラのコミニオン化」。

昨年、自給用の野菜づくりしか知らなかった横谷のおばちゃんが、「これまで余って捨てていた野菜でも金になる」ことを知った。

今年は、そこからさらに数歩進んだ段階でのムラへの働きかけを模索してきた。ここでは、その総括と来年へ向けての課題を考えてみたい。

「眼前のムラ」横谷と共同体

われわれは、昨年5月横谷部落への「組入り」をし、正式に部落の仲間としてむかえ入れられた。その後、へ直販の生産活動を通して、

われわれは村落共同体の構造の中に確かな位置を築いてきたといえよう。

また、われわれの運動は、へ直販の生産という経済構造からの変革

と同時に、「村落共同体の共同性の復権、そしてそのコミニオン的質への移項」という社会構造そのものへの運動をも展開しつつある。

「生産」からのアプローチ

では、まずへ直販の生産面での今年の活動をふりかえってみよう。

昨年、横谷の各農家からの直販への参加は、自給用野菜の余剰分を出荷するという形であった。そこで今年は、次の段階の獲得目標として、主に以下の4点を設定した。

1. 直販用野菜の作付け
2. 各戸の野菜作付面積の拡大
3. 近所の2、3軒での共同耕作
4. 出荷作業の共同化

そしてこれらを、毎週の各農家訪問や「カマの穂」の発行等の情宣活

動によって、部落の人達に呼びかけ
てきた。

★ ★ ★

しかし、その結果、実際達成でき
たのは、次のようなことであつた。
まず、直販用の生産・出荷を行な
つた農家としてあげられるのは、瀬
川（年商売上は約10万）、山崎（約
6万）、片山（約5万）の3軒。

自給用野菜の他に、直販を考慮し
て野菜づくりをした農家としては、
原田、上田、後屋敷、上之田、岸
（うしろやしき）の5軒があつた。これらの家の年
商売上は約2〜3万で、おぼちゃ
んのこつかい銭かせぎの域をまだま
だ抜けきれていない。

畑の面積を拡大したのは、原田（
5畝）一軒であつた。

共同耕作（別稿参照）では、2畝

ルーフ、5軒、面積にして1反8畝
が実現したにとどまつた。また、そ
のスタイル、方法においても、従来
部落で行なわれていたものを踏襲す
る結果となつた。

出荷作業の共同化にしても、その
裏づけとしての「直販用野菜の生産
」が前記のような段階にとどまつた
ため、その内実はかなり不完全なも
のに終わった。

また、われわれ自身の生産活動に
おいても、具体的な形で提示できる
実績がつかれなかつたといえる。そ
のため、情宣活動もつわつたもの
になつてしまつた。

結局、今年やろうとした4つの獲
得目標は、どれも不完全なままに終
わつてしまつた。

《共同耕作》の過ぎる。

これらのことを踏まえたとき、来
年以降の運動は、何よりもまず、各
農家のおぼちゃん一人一人を、野菜
づくりの場へとひっぱり出すことが
始めねばならない。

すなわち、《共同耕作》——部落
にある休耕田を畑地化し、そこで直
販にみあつた生産計画にのつとして
野菜づくりをすること——へとおぼ
ちゃん達をまきこんでいくことであ
る。

さらにそこで必要となつてくるの
は、~~部落~~の共同耕作が、労働生産性
において米づくりや土方、出稼ぎにお
とらぬこと、その収益にのりて家計
への影響力をもつこと、そしてその
ための確実な生産計画と運営であらう

う。

われわれは、こうして、へ直販にへ共同耕作という新たな武器を加えて、次のステップを歩み出そうとしている。

いどもの意志の底に…

次に、へ直販・生産以外の面での活動をいりかえってみよう。

★ ★ ★

今年、新しい動きとしてさやかなや一歩を踏み出したのが、へこども会への参加である。

部落のこども会は、従来年一回の月のごともの日に、婦人会が主催する年中行事のひとつとして行なわれてきた。

しかしそれは、「こども達が自主的に日常の中で社会的存在として自

己をとりえつつ、共同性を創造して

いく場」といった意味あいからは程遠いものだった。先日の分校の廃止問題にしても、大人達が部落の問題としてとりくむことはあっても、やはりこども達自身の動きはなかった。こんな部落のこども達が、日常的な行為として自決性・創造性を身に付けていけるような場を、われわれはこども会の中につくっていかうとしていく。

このことは、われわれの主張を部落の中に明確に、かつ具体的に提示していく上、大きな意味があると思う。(こども会に關しては別稿参照)

平易な論理・

ダイナミックな行動を

常会や婦人会などの日常的な場でのかわりには、なかなか思つたように

進展させることができなかった。

たとえば、6月の振興計画の説明会を考えてみよう。役場側の、あいまいで抽象的なビジョンに対し、われわれもまた、同様の抽象論で問題を指摘するにとどまった。けれども、このとき必要だったのは、振興計画に対置できる、われわれの側により具体的に実現可能なプランを提出することであつたはずだ。

2

また、常会・婦人会での発言・祭り、運動会などの部落行事への共同・体独自の参加、農協の広島直販(先号参照)に対する問題提起、分校廃止反対運動、そのどれをとっても中途半端にしかなるえなかった。それはやはり、具体的なプラン、さらにそれを現実のものとしていく行動力に欠けていたからである。

部落において、さまざまな社会状況や問題に対する解決は、無難な経験論が優先されている。

そこで、われわれがそうした部落をのりこえ、リードしていくためには、あらゆる問題に（いかなるささいな問題・制度として確立されている問題も含めて）、一貫した平易な論理と、タイマミックな行動力に対処していく以外にはない。その積み重ねの中でこそ、部落に対する大きな影響力をもつことができるのである。

これらを踏まえて、来年の具体的な課題として

①、今年みかんで行なった共同購入の拡大

②、各種部落行事への独自のプランの提出と積極的な参加

③、振興計画に対する具体案での対決

④、横谷・笹目原の道路整備の推進

⑤、共同出荷所の設置

などを行なっていくと考えている。

《生産者組合》をめざして

今年、直販を通して、横谷以外の部落に対し行なった活動として、「共同直販グループ」づくりがある。

このねらいは、各部落ごとの出荷農家を、まず出荷作業を共同化することからグループ化していき、それに横谷の共同耕作グループを加えて生産者の組合へと編成していくことにある。

そのオースとして今年、野坂・稲代・長安、栃木などの新しい部落

に対し、その直販への参加とグループ化を行なってきた。出荷農家に対しては、「自発的な参加と出荷を前提とした野菜づくり」を参加の条件としたため、横谷に比べ組織化は比較的順調に進んでいる。

すでに出荷作業の共同化がシステムとして確立できた部落は、野坂・稲代、栃木である。またグループの出荷調整が自発的に行なわれ、部落としては、野坂、栃木があげられる。

10月には、これら各グループを束ねての集会を行ない、生産者の組合化へと踏み出すことができた。（別稿参照）

ただ、これらの各部落に対する今年の運動の傾向としていえるのは、ややシステム化に片寄り、「コミュニ

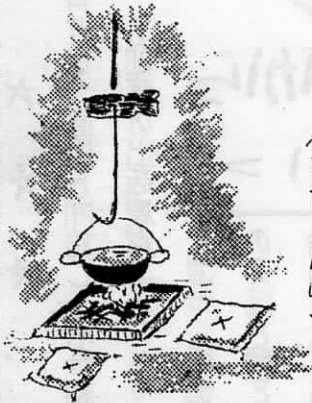
的な質をグループ化の中に充分に含みこませることができなかつたという点である。

来年の獲得目標として、まず

- ① 生産面での共同化へグループごとの作付計画・生産調整、栽培技術の交換、部分的共同管理
- ② 出荷作業や品質管理の共同化
- ③ へ共同直販農家の集いの定期集會化

などを考えている。

(文責 山崎)



共同耕作に就いて、その運動的な位置づけと、来年へ向けての詳しい計画については、紙面の都合上次号で述べることにし、ここではひとまず、今年行なった共同耕作の紹介とおもな反省点を簡単に記しておきたい。

今年実現したのは2グループで、

ひとつは

徳田のぼ

あさん、

下坪のぼあさん、

釜ヶ原のねえさん、

それに共同体のツネちゃん、の4人、

もうひとつは、山崎のぼあさんと共同体の一軒家。

前者を、

ってその内容を紹介すると、場所は、共同体が近所農家から借りている土地1反ち畝。収益は、

総収入から種代、耕運機代をさしひ

いた残りを、年末に4等分することとした。

ち畝分の畑地には、キャベツ・人参、ゴボウ・二度豆・枝豆を、一反分のもと休耕田には小豆を植えた。

反省点として、

- ①、狭い土地に細かく作付けたため、4人で手をかけたわりには、

共同耕作のおと1

あまりお金にならなかった
②、小規模だ

ったため、当初共同体と共同耕作をやるメリットとしてあげていた耕運機が活用できず、メリットとして生きなかった。③、おばちゃん達が、農家の生計を左右する収入源として共同耕作を意識するところまで、もっていけなかつたことなどがあげられる。

★ ★ ★

10月17日、直販を開始して以来初めて、各部落の出荷農家のおばちゃん達が、役場の2階で顔を合わせた。名

より身近な 対話のなかから ＜共同直販農家の集い＞

又けて「共同直販農家の集い」。

ちよつと、この時期は脱穀やもみすりまでてこま

というのは、晩ごはんの準備どきであつて、皆最初はなかなかうんと言わなかつた。

なじしろ、行政機関や農協以外の

呼びかけでこんな集まりをするなんて、まれにみるこなのである。「役場も農協もたまけとりんさう」と部落の人達。

★ ★ ★

現在、直販に野菜を出荷している部落は、横谷・小角・稲代・長安・栃本・野坂の6部落。そのうち、野坂・小角を除く4部落の出荷農家の代表と有志が集まつた。

この集会での、私たちのねらいとしては、主に次のちあがあつた。

の説明

1. 「共同直販」の意味するもの
 2. 無農薬という基本線の徹底
 3. 出荷農家を一つの集団として意識する方向へもっていくこと
- (出荷作業の共同化、出荷タールの

1. 7. 化)

4. 来年の生産調整

5. 直販の全体像(出荷↓集荷↓梱包↓運搬↓販売)を把握してもらうこと

★ ★ ★

さて、ポツリポツリと皆が出そろい、まずは自己紹介から。それまで時間待ちに、三々五々何やかやと話していたおばちゃんたち、急に恐縮して自分の名まえを言い、「よろしくお願いいたします」と他部落の面々にていねいに頭を下げた。

いつもは、大きなハキハキした声でしゃべりかけてくる瀬川のおばちゃん、この時は、よく聞ききれないほど小さな声で、名前を名のったのが、とても印象的だった。けれど、実際の話にはいると、お

ばちゃん達の口調は歯切れよく、快活だった。

皆、目をキラキラさせて、野菜づくりの話をしてくれた。

「春、太根をち坪ほど播いたら、こげえないかいへ大きい」のができてなあ……」

「今年は農協からナスの苗を買ったんだが、植えた次の朝、みな霜にやられてしまったんだなあ……」

「こんな話を始めるときりがなく、次から次に出来、不出来の話に花が咲く。」

技術的な話や新品種の話をするとおばちゃん達は、用意してきた小さなノートに、慣れない手つきで、熱心に書き込んでいく。

★ ★ ★

「以前は、自家用につくって余っ

た野菜は、牛にやったり、田へ捨ててしまったりしたんだが、それをお金にしてもらって、大変喜んでいますよ」というところから始めていった。私たちの直販・今では、しだいに、「あんたらが来年の計画を詳しくたてんさって、もう一度、こんな集まりをひらあて、そこで話しんざりやあ、やりやすかろうしなと、こちらの意図をどんどん先どりしてくるたのもしいおばちゃんもできていくる。」

また、「来年は頑張っていい野菜をたくさんつくってみましよう」と宣言してくれる人も少なくなない。

そこで、来年の生産調整のために資料として、今年一年の各野菜ごとの出荷量推移のグラフを用意した。

「この時期に、こんな野菜をつく

ると、確実にはばけますよ」などと解説していくと、皆いつせいに注目。狭い自分の家の畑を頭に描いて、来年そこに居並ぶはずの野菜を、思案しているのだろうか。

一応、皆、私達の話には、うんうんとうなずきながら聞いてくれた。けれど、自分の畑という枠をのりこえて、新しく休耕田を畑にして共同耕作を始めるとか、隣りの家の畑のことも一緒に来年の生産を考えると、かいつ拵想にはまだ程遠いようだ。

(文責 林田)

